ごあいさつ

「ふるさと名取の歴史展」は今回で16回目を迎えます。

これまでは市全体を対象にした時代やテーマ別の展示、速報的な発掘成果展示などを開催してまいりました。

ところで名取市をよく見ますと、山地から海岸まで多彩な土地や環境からなっています。そしてそれぞれの地域でこれまで個性的で特色ある歴史文化が育まれてきました。それを証明してくれるのが各地に残されてきた遺跡や古くからの建物、伝承されてきた芸能などの文化財です。

今回から４回シリーズで各地域の歴史文化遺産(お宝)を紹介する展示を開催します。そのねらいは地域の「お宝」をもう一度掘り起こし、見つめ直すことにより、各地域、ひいては名取の魅力を再発見することにあります。

今回はその一回目として、名取市の南西部にある愛島・名取が丘・館腰の地区(増田西地区の一部を含む)を取り上げました。身近な「お宝」をじっくりご覧いただいた上で、皆様がお持ちの情報などございましたら、いろいろお教えいただきたいと存じます。

なお、昨年度と今年度に発掘調査を実施しました４遺跡について、その成果を速報として紹介するコーナーも設けました。あわせてご覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の展示に関してご協力いただきました関係機関、関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成 26 年 11 月
名取市教育委員会
教育長　瀧澤　信雄

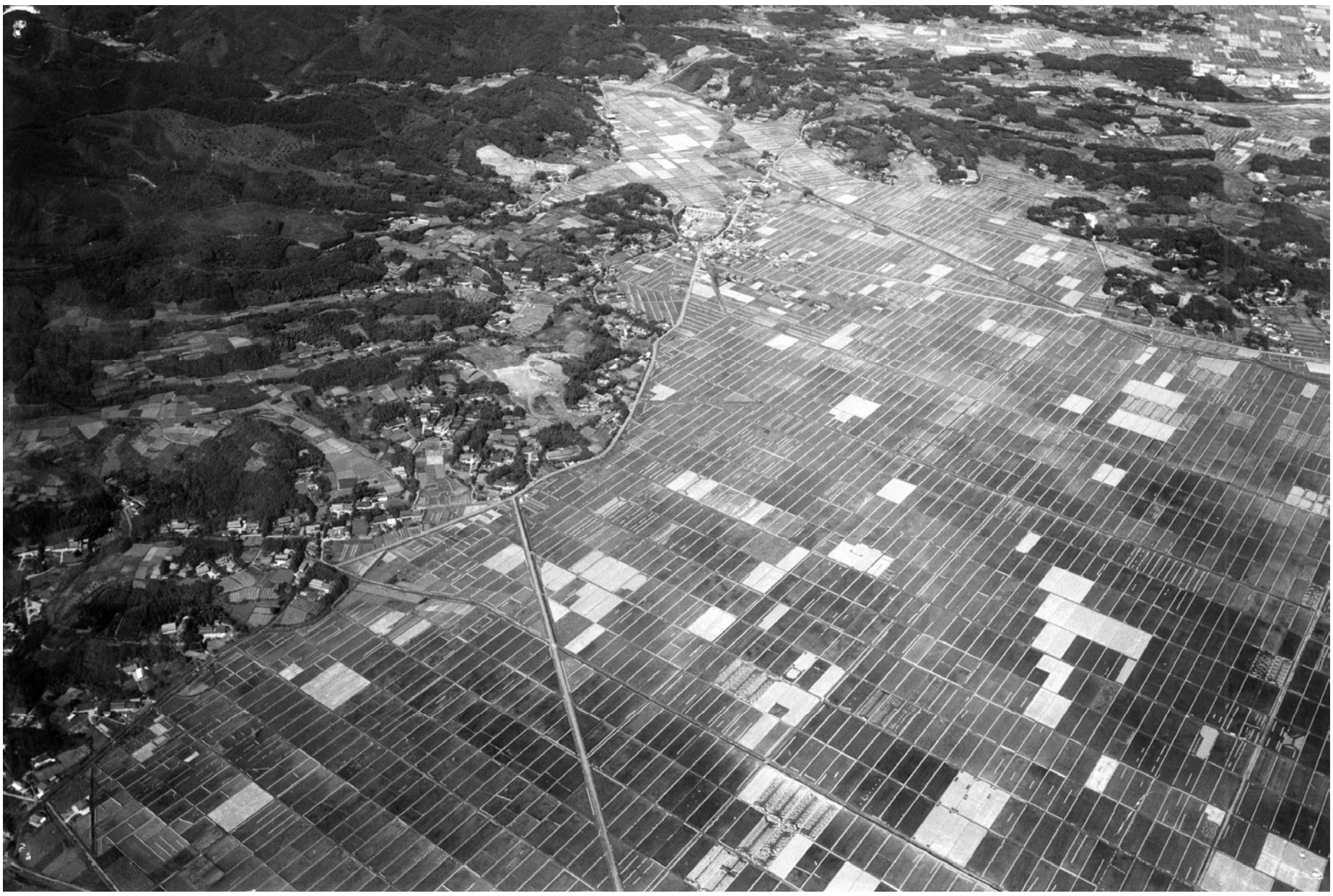
お宝いっぱいの
愛島・名取が丘・館腰地区あたり

お宝いっぱいの

愛島（めでしま）・名取が丘（なとりおか）・館腰（たてこし）地区あたり

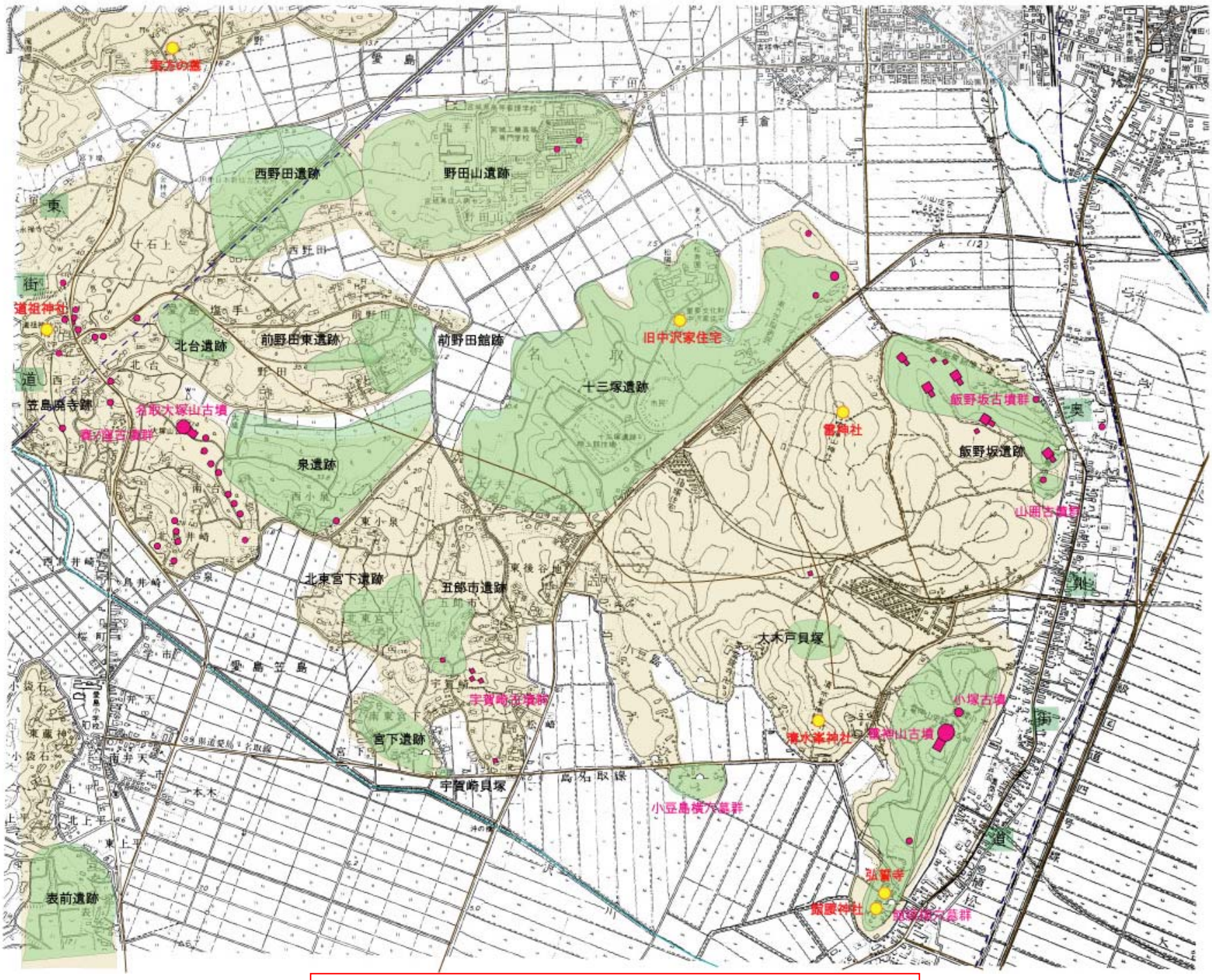
愛島（めでしま）から館腰（たてこし）地区にかけては名取市でも歴史が古く、むかしの人びとのことを調べる手がかりが数多く残されています。

名取市にある遺跡のほぼ半分の数がこの地域の丘やそのまわりに分布しており、その中には雷神山古墳（らいじんやまこふん）のような国が指定した遺跡もふくまれています。また、かつては西の山ぞいと東の平地には街道が通り、人びとの往来がさかんでした。そのため、神社やお寺、名所、伝承なども各地に残されています。



空から見た愛島地区(昭和 48 年)

南東から　上が東にのびる大きい丘



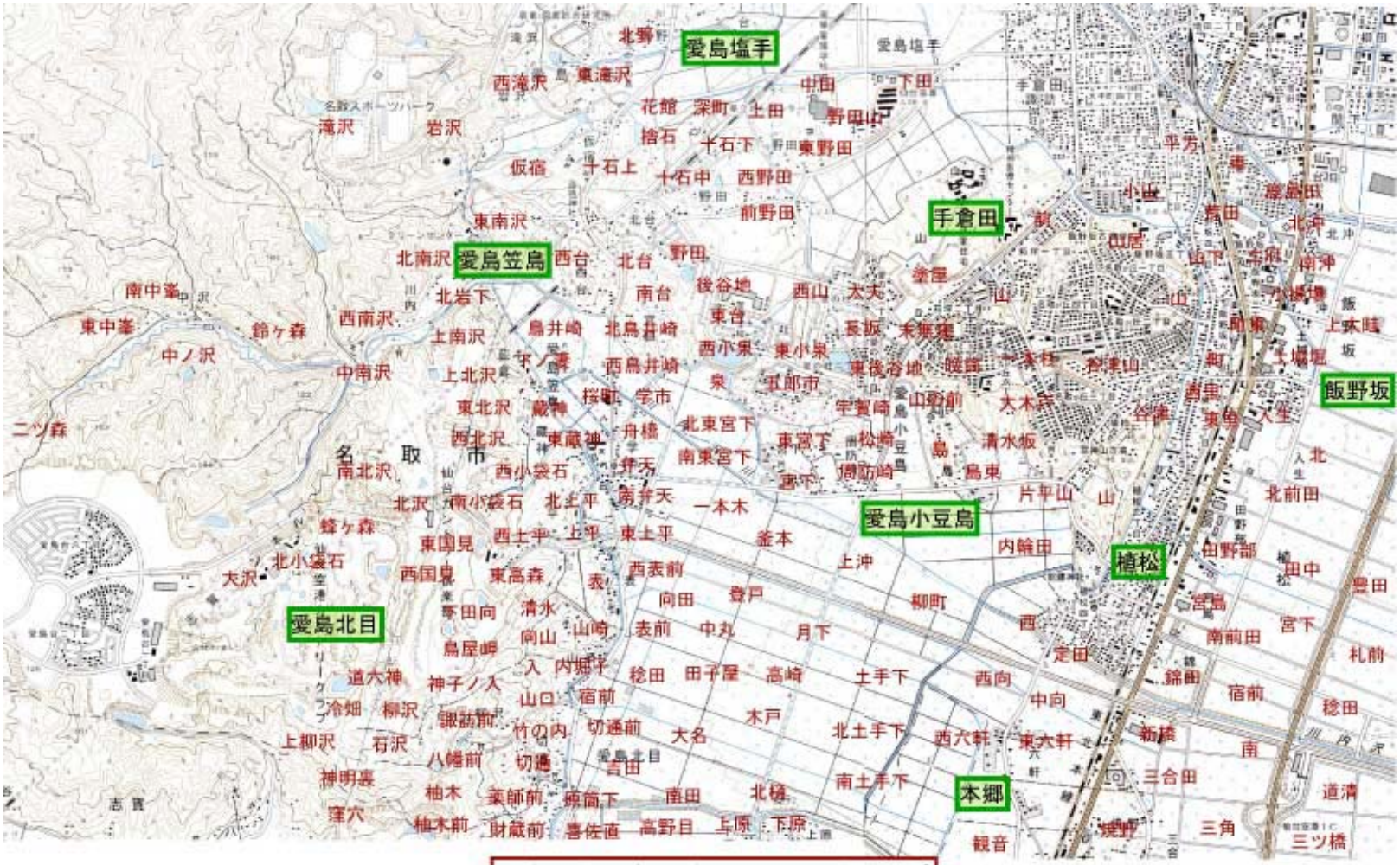
愛島・名取が丘・館腰地区のお宝マップ

地名からわかるむかしのようす

　土地の名前である地名にはつけられた理由がいろいろあり、それを調べると、むかしのようすを知ることができます。

　地名を大きく分けると、地形や自然の特徴でついたもの(小豆島(あずきしま)など)、神社やお寺に関係したもの(宮下(みやした)など)、家や橋、田畑に関係したもの(東六軒(ひがしろっけん)など)などがあります。

　皆さんがお住まいの地名はどんな理由でつけられたのでしょうか。



愛島・名取が丘・館腰地区の地名マップ

新地名（～丁目）の地区は旧地名にしている

上の地名の中で、ついた理由をいくつか考えてみました。

長坂（ながさか）・・・長い坂があったところ
清水坂（しみずざか）・・・清水（きれいな水）がわき出た坂
舟橋（ふなばし）・・・船をつないで橋にした湿地のようなところ
土城堀（どじょうほり）・・・ドジョウがとれた堀か、館（やかた）をめぐる堀があったところ
宿前（しゅくまえ）・・・街道を往来する人のための宿（やど）が近くにあったところ
鹿島田（かしまだ）・・・鹿島神社に関係した水田があったところ
一本杉（いっぽんすぎ）・・・杉が一本、目立つようにはえていたところ

みなさんも地名がついた理由、考えてみてください。

くらしの舞台～自然と大地

平地につき出たなだらかな丘

名取市の西の方には高い山が南北に続いており、豊かな森になっています。そこから東の方には小高くなだらかな丘がいくつかのびています。中でも愛島から館腰地区にかけては３㎞以上も長く大きな丘が広がっています。豊かな林や土地に恵まれたこれらの丘やそのまわりの平地が、古くからおもなくらしの舞台となってきました。

空から見た名取が丘から館腰地区（昭和４６年）

東から　左がわの下の方に雷神山古墳が見える

地層からわかる大地のなり立ち

　この丘を形づくっている岩石や地層から、おおよその大地のなり立ちを知ることができます。

　下の方からは海にすむ貝の化石が見つかるので、海の底につもった砂の層とみられます。上の方には火山の噴火で飛んできた軽石や火山灰の層がつもっています。黒い土の上が今の地面です。その地層の間には川のはたらきでできた小石や粘土の層がみられるところもあります。下から上までの地層ができるのにおよそ500万年という、気の遠くなるような時間がかかっています。

いまの地面

黒土（1 万年前から現在）

火山灰（蔵王あたりから飛来）

軽石の層

（7～8 万年前に川崎町の方から飛来）

粘土の層など

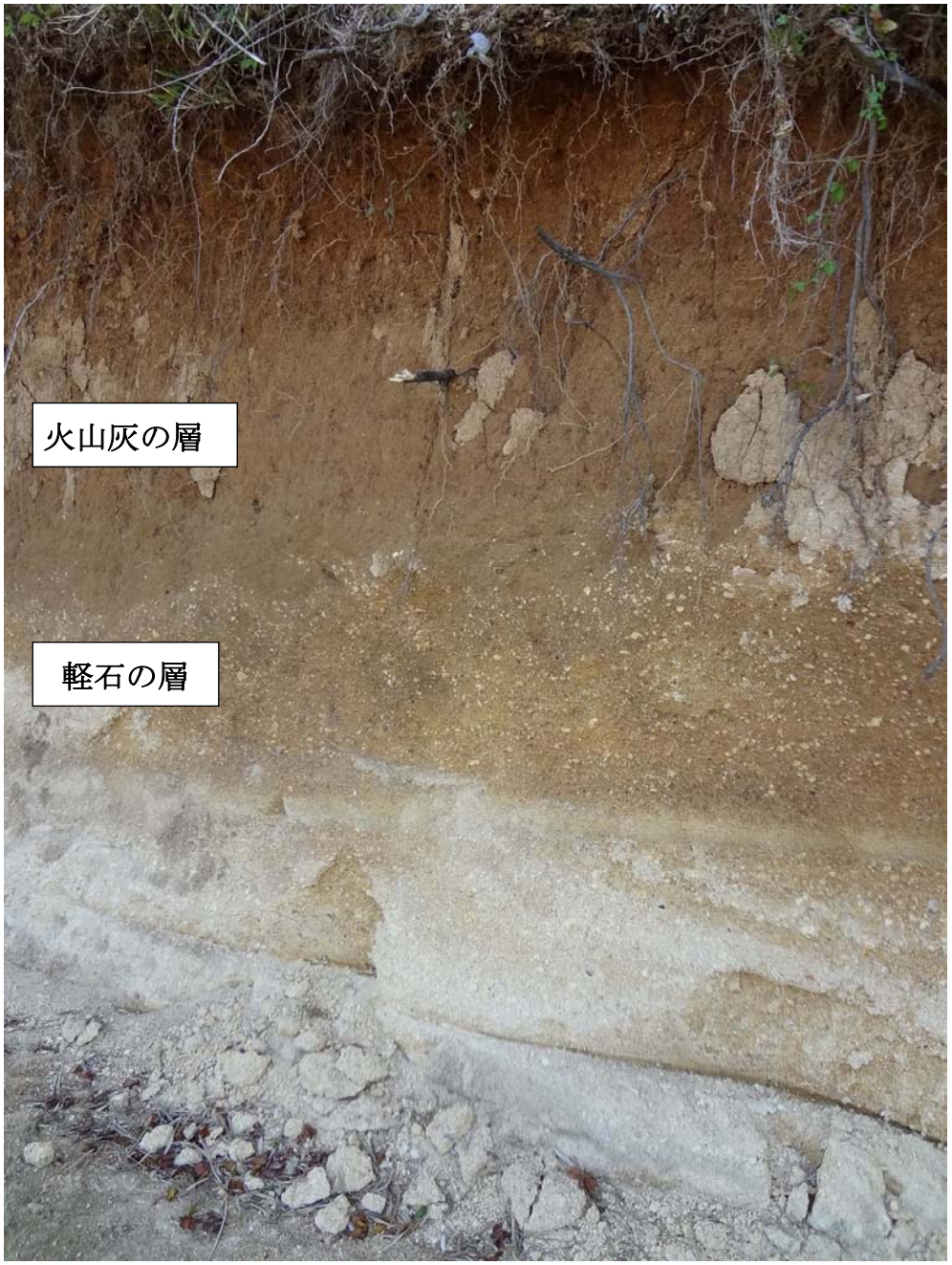
石ころの層（河原の石）など

砂の層など

「仙台の自然」より

海の化石をふくむ砂の層

（竜の口層　およそ 500 万年前）



火山灰と軽石の層(愛島笠島)

火山噴火で遠くから飛んできた

化石の層(愛島小豆島)

あちこちに海に住む貝の化石が見える

大地に残された生活のあと

　丘やそのまわりの大地には、名取の先人たちがきずいた生活のためのあとが遺跡として残されています。これまでの調査で文字がなかった時代、文字に書かれなかった人びとのくらしのようすがわかってきました。

氷河時代を生きていた人びと

　およそ２万年前(旧石器時代)は、氷河時代でも最後の寒い時期でした。海面は大きく下がり、森やそこで生きていた動物たちも、今とは大きくちがっていました。

　そのころの人びとが残した石器が野田山遺跡(のだやまいせき)の火山灰の中から見つかっています。石器はヤリの先に取りつけたり、ナイフや皮なめしに使ったりしたものとみられます。動物の狩りなどで食べものを手に入れていたようすがわかります。

　野田山遺跡は、今のところ名取では最古の遺跡です。

おもなできごと おもな遺跡と人

年代	現在	約500年前	約1千年前		約2千年前	約1万年前	約2万年前
	2000	1500	1000	500	AD / BC		

時代																	
	平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	戦国	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器	
	近代国家へ				武士の時代			天皇と貴族の時代 クニから国へ						ムラからクニに		自然とともにいきる	
	農村から住宅地へ	奥州街道がつくられる			山ぞいの東街道にぎわう			税をおさめる農民のくらし	東山道がつくられる	大きなお墓をつくる	米づくりをはじめる	自然食のくらし				氷河時代を生きる	
	正岡子規	道祖神路	旧中沢家住宅	松尾芭蕉	宗久			西行	藤原実方のお墓	道祖神社	笠島廃寺跡	前野田東遺跡	名取大塚山古墳	十三塚古墳	雷神山古墳	飯野坂古墳群	泉遺跡	十三塚遺跡	泉遺跡	宇賀崎貝塚	大木戸貝塚	野田山遺跡

空から見た野田山遺跡(南東から)
県立がんセンターの場所が遺跡の中心

火山灰の層から見つかった石器
ていねいに石器を掘り出しているところ

旧石器時代の人々の暮らしのようす

狩りの準備をしている旧石器人(きゅうせっきじん)(復元図)

(仙台市文化財パンフレット第 33 集より)

海や沼が近くに見えた縄文時代のムラ

１万年前ころから気候が暖かくなるとともに海面が上がり、６～７千年前ころには山や丘の近くまで海が広がりました。森や海には植物や動物、魚、貝などがいっぱい。多彩な食べものが縄文人のくらしを支えました。

貝塚を調べると当時の環境や食生活がわかります。宇賀崎貝塚（うがさきかいづか）では下からは海の貝、上からはシジミの貝が重なって見つかっており、近くの平地がしだいに海から沼に変わっていったことがわかりました。泉遺跡（いずみいせき）からはそのころのたて穴住居のあとが数多く見つかっています。

おもなできごと おもな遺跡と人

年代	現在	約500年前	約1千年前		約2千年前	約1万年前	約2万年前
	2000	1500	1000	500	AD / BC		

時代																		
	平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	戦国	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
	近代国家へ				武士の時代				天皇と貴族の時代 クニから国へ					ムラからクニに	自然とともにいきる	
	農村から住宅地へ				奥州街道がつくられる				山ぞいの東街道にぎわう		税をおさめる農民のくらし	東山道がつくられる	大きなお墓をつくる	米づくりをはじめる	自然食のくらし	氷河時代を生きる
	正岡子規	道祖神路	旧中沢家住宅	松尾芭蕉				宗久	西行	藤原実方のお墓	道祖神社	笠島廃寺跡	前野田東遺跡	名取大塚山古墳	十三塚古墳	雷神山古墳	飯野坂古墳群	泉遺跡	十三塚遺跡	泉遺跡	宇賀崎貝塚	大木戸貝塚	野田山遺跡

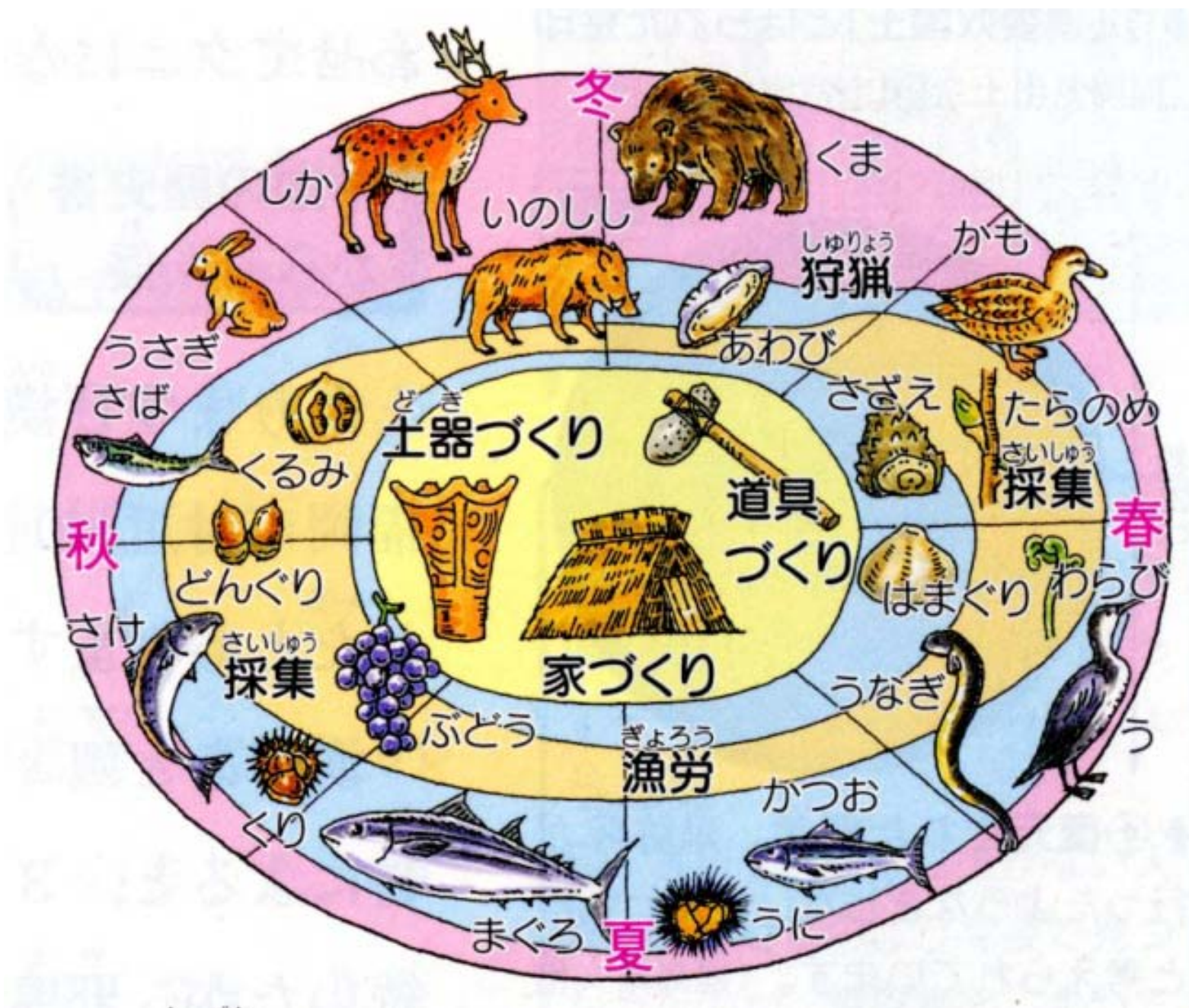
縄文人のくらし(想像図)

狩りや魚取り、植物採集が食べものを手に入れる方法

今から6～7,000年前ごろ

縄文時代前半の土地のようす

6～7千年前ごろ、海が大きく広がっていた



縄文人のたべもの

海・川の幸、山の幸が縄文人のくらしを支えた

宇賀崎貝塚の貝がらの層

ハマグリ・アサリなどの二枚貝が多い。貝塚は食べた貝がらなどを捨てた場所

空から見た泉遺跡(東から)

右がわの建物は県の警察学校

泉遺跡（いずみいせき）のたて穴住居あと

70 軒以上の住居あとが見つかっているが、長年にわたって建てられた総数

湿地で米づくりを始めた弥生時代

２千年以上前に名取にも西日本の方から米づくりの技術が伝わります。人びとは沼から湿地に変わった近くの土地に田んぼを作り、米づくりを始めました。

そのころのムラのあとが十三塚遺跡（じゅうさんづかいせき）などです。見つかった土器には煮炊きなどに使った甕（かめ）やフタがあります。大きな壺（つぼ）には大切なイネの種もみを入れていたのでしょうか。しかしこの時代はとれる米の量が少なく、それを補うために森などから自然の食べものも手に入れていたようです。

おもなできごと おもな遺跡と人

年代	現在	約500年前	約1千年前		約2千年前	約1万年前	約2万年前
	2000	1500	1000	500	AD / BC		

時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉	室町	戦国	安土桃山	江戸	明治	大正	昭和	平成
	自然とともにいきる		ムラからクニに	クニから国へ	天皇と貴族の時代			武士の時代				近代国家へ				
おもなできごと	氷河時代を生きる	自然食のくらし	米づくりをはじめる	大きなお墓をつくる	東山道がつくられる	税をおさめる農民のくらし		山ぞいの東街道にぎわう			奥州街道がつくられる				農村から住宅地へ	
おもな遺跡と人	野田山遺跡	大木戸貝塚 宇賀崎貝塚 泉遺跡	十三塚遺跡 泉遺跡	飯野坂古墳群 雷神山古墳 十三塚古墳 名取大塚山古墳		前野田東遺跡 笠島廃寺跡 道祖神社 藤原実方のお墓		西行 宗久			松尾芭蕉 旧中沢家住宅 道祖神路 正岡子規					

調査前の十三塚遺跡
いまは公園の野球場になっている

泉遺跡で見つかったお墓
石庖丁(イネの穂積み具)がそえられていた

弥生時代（やよいじだい）のムラのくらし(想像図)

米づくりがくらしの中心となった

大きな古墳（こふん）と古墳づくりを担った人びとのムラ

　1600年前ころには名取の平野も大きく広がり、各地にムラができました。そのムラがやがて有力な豪族（ごうぞく）にまとめられていきます。その動きを、小さな古墳から雷神山古墳のような大きい古墳への移り変わりなどから知ることができます。

　古墳づくりは豪族が支配するムラの人びとが担いました。そのムラのあとが十三塚遺跡や前野田東遺跡（まえのだひがしいせき）などです。

おもなできごと おもな遺跡と人

年代	現在	約500年前	約1千年前		約2千年前	約1万年前	約2万年前
	2000	1500	1000	500	AD / BC		

時代														
	平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	戦国	室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	弥生	縄文	旧石器
	近代国家へ				武士の時代					天皇と貴族の時代			クニから国へ	ムラからクニに		自然とともにいきる
	農村から住宅地へ			奥州街道がつくられる			山ぞいの東街道にぎわう			税をおさめる農民のくらし		東山道がつくられる	大きなお墓をつくる	米づくりをはじめる	自然食のくらし	氷河時代を生きる
	松尾芭蕉	旧中沢家住宅	道祖神路	正岡子規			宗久	西行		藤原実方のお墓	道祖神社	笠島廃寺跡	前野田東遺跡	名取大塚山古墳	雷神山古墳	飯野坂古墳群	十三塚古墳	泉遺跡	十三塚遺跡	泉遺跡	宇賀崎貝塚	大木戸貝塚	野田山遺跡

空から見た雷神山古墳(前方後円墳)
そばにあるのは小塚古墳(円墳)

飯野坂古墳群の一つ(前方後方墳)
古墳群のなかで最も北にある山居北古墳

名取大塚山古墳(前方後円墳)

見えているのは直径がおよそ 60m、高さ 8.5mの後円部

古墳時代のムラのようす(想像図)

力のある豪族が支配するムラの一つで、はるか遠くに古墳が見える

十三塚遺跡のたて穴住居あと

遺跡内の林には、いまでも埋まりきらない住居のあとが数多くある

前野田東遺跡のたて穴住居あと

古墳時代の中ごろから、煮炊きの場が炉からカマドに変わる

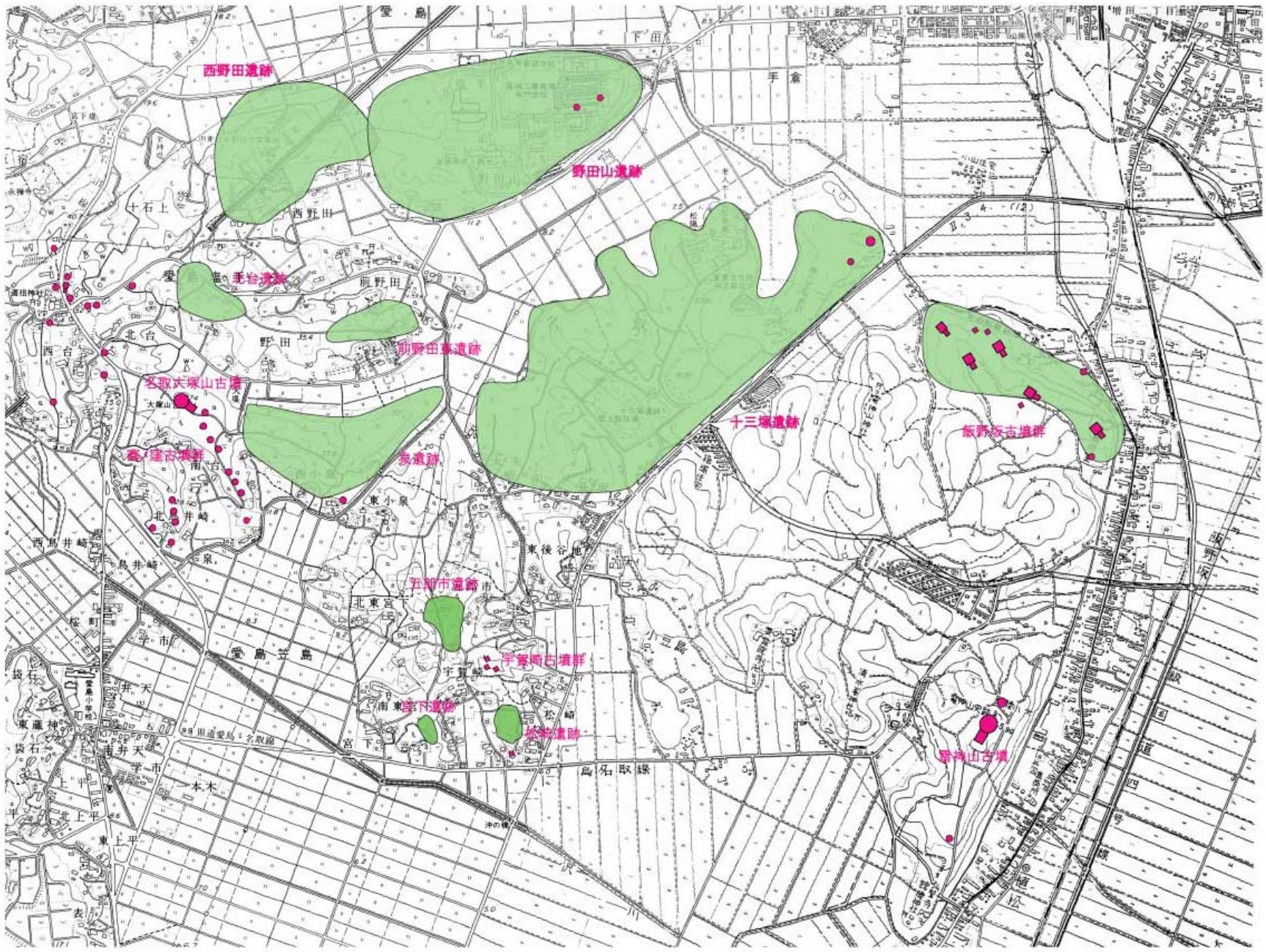
コラム１　古墳（こふん）の宝庫　なとり

　愛島から館腰地区あたりには大小の古墳が数多く分布し、特に大きさが 50m をこえる古墳では東北地方で最も多く集まっているところとして知られています。

注目は東北地方でもっとも大きい前方（ぜんぽう）後円墳（こうえんふん）の雷神山古墳（らいじんやまこふん）と、５基の前方後方墳（ぜんぽうこうほうふん）

などからなる飯野坂古墳群（いいのざかこふんぐん）で、これらは丘の東のふちに平野を見下ろすように並んで造られています。

　また、同じ丘の山ぎわには前方後円墳の名取大塚山古墳（なとりおおつかやまこふん）をはじめ、30 近い数の小さな古墳が分布する賽ノ窪古墳群（さいのくぼこふんぐん）があります。



愛島・名取が丘・館腰地区の古墳マップ

空から見た雷神山古墳(前方後円墳)
そばにあるのは小塚古墳(円墳)